

太田齋先生を送る

竹越 孝

太田齋先生は、2018年3月に本学を定年により退職された。先生は、1976年に本学中国学科を卒業後、東京都立大学大学院に学び、博士課程単位取得退学後は、東京都立大学人文学部助手を経て、1986年に本学に専任講師として着任、以後1987年に助教授、1996年に教授となって教鞭を取られた。本学では教授職の他、2009年から2013年まで学術担当理事（外国学研究所長・大学院研究科長兼任）、2015年から2017年まで学術情報センター長の任にあった。また、学会における活動では、2006年から2008年まで日本中国語学会編集委員長、2012年から2014年までは同副会長、そして2014年から2016年までは同会長を務められた。

大学と学会において要職を歴任する中で、太田先生がこれまでに世に送り出した研究業績は、編著書が20冊余り、論文は80本超を数える。そのいずれもが、日本と中国の学界において軽視すべからざる重要な学説となっており、質量ともに凡百の研究者には到底真似のできる業ではない。

太田先生の学問の特徴は、中国の伝統的な音韻学と、比較的若い分野である方言学を、高いレベルで融合させたところにある。先生は極めて精緻に文献を扱うフィロロジストであるとともに、言語調査のために田野を駆け巡るフィールドワーカーでもある。この両方の資質を兼ね備えた研究者は、世界的に見てもごくわずかしかならず、そのスタイルは近代中国語学の開祖であるベルンハルト・カールグレン（Bernhard Karlgren, 1889-1978）を彷彿とさせる。近年は、そのカールグレンの打ち立てた枠組に抗うかのように、中国語を漢字のくびきから解き放ち、時間（歴史）と空間（方言）両面からのアプローチによる「語」単位の中国言語史を構想されており、この分野の仕事は今後集大成されて日中双方の学界を大いに裨益するものと信じる。

太田先生がこのような高い学問的見識を背景に研究と教育にあたり、それによって神戸外大を日本の中国語学研究における一大拠点に押し上げた功績は、今後も色褪せることがないであろう。

私自身が同僚として接する中で太田先生に抱いた印象は、学問的にも人間的にも、「誠実」の一言に尽きる。学問的に誠実であるということは、一言一句をゆるがせにせず、限界まで調べ尽くし、考え抜くということであり、大学院時代の師である故慶谷壽信教授が学生を鼓舞する言葉であった「常に exhaustive であれ」を、最も体現する門下生の一人と思える。人間的に誠実であるということは、決して自分を偽らず、その言動に責任を持つということであり、大学や学会の仕事が難局にあった時も、我々は常に太田先生を信頼し、大きな安心感の中で進むべき道を決めることができた。

太田先生退職後の中国学科は、神戸外大出身の教員が不在の時代を迎えることとなった。その大学の出身者でなければ、良き伝統を継承し得ないとは思わない。我々が太田先生を始めとする数々の先達が作り上げた伝統をいかに受け継ぎ発展させていくかは、我々が研究と教育に対していかに誠実であるかにかかっている。

終わりに、太田先生のご多幸と益々のご健筆をお祈り申し上げます。